

**令和7年度
千葉県立中央博物館実施計画
外部評価票**

1 判定

指標		過去実績		R7年度自己点検				目標値			備考
		(R5)	(R6)	目標値	実績値	達成度	判定	(R8)	(R9)	R10	
中央博物館の年間利用者数	入館者数（本館）	96,381人	95,297人	109,000人	110,592人	101.5%	A	121,000人	133,000人	146,000人	
	入館者数（海博）	60,118人	78,630人	61,000人	80,642人	132.2%	A	61,000人	61,000人	61,000人	
	ウェブアクセス数（本館）	203,613件 (R3～R5 平均)	185,881件	212,000件	198,964件	93.9%	B	221,000件	230,000件	240,000件	
	ウェブアクセス数（海博）	55,463件 (R3～R5 平均)	57,050件	59,250件	59,149件	99.8%	B	61,450件	63,650件	66,000件	

2 自己点検

・本館の入館者数は目標値を超えた。特別展「房総うみの幸」、秋の展示「水辺の昆虫」、および人気小説「薬屋のひとりごと」とコラボした企画展「生薬～自然からの恵み～」が好評であったことが来館者増につながった。 ・本館のウェブアクセス数は目標値には及ばなかった（達成度93.9％）ものの、前年度は上回った。引続きSNSの発信に努め、ウェブアクセス数の増加につなげる。 ・海博の入館者数は目標値を大きく上回った。ウェブアクセス数についても達成度が99.8％とほぼ達成した。

3. 有識者による評価

・本館・海博ともに入館者数の目標を達成し、とりわけ海博は達成度132％と大きく上回った。来館者のニーズを的確に捉えた特別展や企画展が入館者増に結実しており、自己点検の分析は妥当である。本館のウェブアクセス数は目標未達（93.9％）ながら前年度を上回っており、SNS発信を強化する方向性も適切である。 ・入館者数が目標値を達成したことは、魅力ある特別展・企画展の開催による効果が大きいと思われるが、昨年度の実績を下回っていることから、さらなる努力を期待したい。 ・特別展「房総うみの幸」、秋の展示「水辺の昆虫」、企画展「生薬～自然からの恵み～」が好評で入館者数の目標値を超えたのは、企画チーム（担当学芸員、広報担当、全職員）の全員の努力の結果だと思います。予算が厳しく大変ななかですが、今後も県民や千葉県について知ってもらいたい利用者の興味を起こさせるような努力を続けていただければ目標達成が継続するのではと考えます。 ・ウェブアクセス数は、ウェブサイトからどのようなコンテンツや情報を入手したいかという点に着目するのが重要である。SNS発信だけに注力しても、ウェブサイトに魅力的かつ有益なコンテンツや情報がなければ、アクセスをしてもらえないのは自明である。利用者が、ウェブサイトは何を求め、アクセスするのかを分析し、ウェブサイトの充実とアクセス数向上に臨んでいただきたい。 ・ウェブアクセスについては、研究、資料、普及啓発行事など、さまざまな側面からの発信が可能なので、労力がかかるが体制を整えて進められると良い。研究員には、千葉中央博らしいコンテンツの検討と充実を意識してほしい。海外への発信も可能と思われる。 ・ウェブサイトについて、多様な人たちを迎え入れるための姿勢がみえにくく、その情報が少ない。
--

4. 今後の活動方針

・引き続き、魅力的な特別展・企画展や季節展を企画し、千葉県民をはじめとする利用者の来館促進に努める。 ・新たにターゲット分析や効果測定を含めたSNSプロモーションを検討するとともに、現行ウェブサイトの充実を図る。 ・現状、ウェブサイトは限られたページのみの分析にとどまっているので、次期情報システムへの更新時に全面的な分析が実施できるようにする。 ・広報に携わる職員だけでなく、館全体として中央博物館らしいコンテンツを検討し、発信できる体制を整える。 ・ウェブサイトについて、バリアフリーを含む多様な利用者に配慮した、分かりやすいページの新規作成や更新を検討する。また、展示や講座等についても、この観点を踏まえた対応を検討する。
--

令和7年度 千葉県立中央博物館実施計画 外部評価票（重点事業1）

重点事業 第1節 千葉の海の魅力を探り、国内外に発信

1. 事業内容および実績

具体的な取組	取組内容	R7事業内容	R7実績
①千葉の海の魅力を探る調査研究の推進と発信	○東京湾の変遷について自然・人文の連携による調査研究と成果の発信 ○千葉県における海藻利用について自然・人文の連携による調査研究と成果の発信 ○房総海岸部における動植物の調査研究と成果の発信 ○千葉の海の幸を自然誌の視点で紹介する展示の開催 ○深海生物についての調査研究と成果の発信 ○分館海の博物館における海の自然に関する調査研究と成果の発信	・重点研究「東京湾の変遷を探る」の研究及び資料収集、小冊子刊行 ・国立歴史民俗博物館と共同研究「千葉の海藻文化と東アジア（仮）」の研究及び資料収集 ・重点研究「房総海岸部における動植物」の予備調査、計画立案、準備 ・深海生物に関する研究及び資料収集 ・特別展「房総うみの幸大百科」開催 ・海の自然に関する調査研究と成果の発信 ・マリンサイエンスギャラリーの開催	・重点研究「東京湾の変遷を探る」に関する研究会を2回開催、小冊子「東京湾の変遷を探る vol. 1」を刊行 ・国立歴史民俗博物館と共同研究「千葉の海藻文化と東アジア（仮）」に関する研究会を3回、調査を2回実施 ・重点研究「房総海岸部における動植物」の来年度の調査研究に向け、メンバーの募集及び予算要求を実施 ・房総海岸部で化石・岩石資料等を収集 ・深海生物に関する原著論文4件、中央博だよりに1件公表 ・千葉の海の幸を自然誌の視点で紹介する特別展「房総うみの幸大百科―千葉の豊かな海と食文化―」を開催（7月12日～9月23日）入館者数20,244人 ・分館海の博物館において、常設展示部分更新及びマリンサイエンスギャラリー用の資料収集を実施 ・分館海の博物館において、県外資料収集（島根県）、県内資料収集（房総沿岸各地）を実施 ・マリンサイエンスギャラリー「うみ鳥っぷ2」を開催（12月13日～5月10日）3月末までの入館者数15,297人
②千葉の海をフィールドとした観察会や見学会の開催	○房総の海辺の生物や地形等の観察会の開催 ○房総の海辺の文化等の見学会の開催 ○勝浦の磯を中心とした海洋生物等の観察会の開催	・房総の海辺の生物や地形等の観察会の開催 ・房総の海辺の文化等の見学会の開催 ・勝浦の磯を中心とした海洋生物等の観察会の開催	・房総の海辺や地形に関する観察会を6回実施（荒天のため3回中止）（本館） ・分館海の博物館において地元漁業者からの資料収集を実施 ・分館海の博物館において観察会を9回（荒天のため2回中止）、磯・いそ探検隊10回、野外実習授業20回、団体フィールドトリップ20回実施

2. 評価指標の判定

取組内容	指標	過去実績		達成度・判定※（R7年度）				総合判定	目標値			備考
		(R5)	(R6)	目標値	実績値	達成度	判定		(R8)	(R9)	R10	
千葉の海の魅力を探る調査研究の推進と発信	展覧会で「千葉の海の魅力の理解が増した」と回答した参加者の割合	(新規)	(新規)	50%	96%	191%	A	A	60%	70%	80%以上	特別展アンケート結果
千葉の海をフィールドとした観察会や見学会の開催	千葉の海に関する講座・観察会、見学会の参加者数	346人	387人	360人	459人	128%	A		375人	385人	400人	本館：海に関する観察会 海博：観察会、磯・いそ探検隊

3. 自己点検

・千葉の海の魅力を探る調査研究について、研究会、調査を着実に進めた。 ・重点研究「東京湾の変遷を探る」に関する研究の成果をまとめた小冊子を刊行した。 ・展覧会で「千葉の海の魅力の理解が増した」と回答した参加者数は目標値を大きく超えた。房総の海の幸に焦点を当て、郷土料理から生物を紹介するアプローチがこの結果につながった。 ・千葉の海に関する講座、観察会、見学会も荒天による中止がいくつかあったものの、着実に実施し、目標値を大きく超えた。

4. 有識者による評価

・研究の成果が小冊子や展示に活かされている点が高く評価できる。加えて、他機関との共同研究は博物館単独では難しい活動を展開するものであると考える。共同研究の一層の推進を期待する。 ・小冊子「東京湾の変遷を探る vol. 1」については、本研究の新たな研究成果についても掲載するとよいのではないか。どこまでが既存の内容で、どこが本研究の新たな成果なのかが少しわかりにくかった。 ・千葉県立中央博物館らしい取り組みであり、自然・人文の連携研究という点も高く評価できる。小冊子もコンパクトにまとまっており、わかりやすい内容になっている。 ・特別展「房総うみの幸大百科」では、房総の海の幸を郷土料理から生物へと結びつける独創的な切り口が来館者の理解促進に大きく寄与し、目標値（50％）を大幅に上回る96％という成果に結実しており、企画の切り口の面白さや取り組みの質の高さがうかがえる。観察会・見学会も荒天による中止を補いつつ着実に実施し参加者数の目標を上回っており、両指標ともに自己点検の評価は妥当である。 ・調査研究の発信について、特別展「房総うみの幸 大百科」やマリンサイエンスギャラリー「うみ鳥っぷ2」などは入館者数が前年度実績や目標数よりも大幅に増えており、成果があったと評価できる。特別展は親子連れをメインターゲットにしたことが入館者増の要因にあげられているが、こうした工夫が今後も期待される。 ・観察会について、本館実施の観察会は予定の1/3が荒天などのために中止になっている。天候に左右されるのは致し方ないが、人気のあるプログラムと推察されるので予備日を確保するなどして、利用者の期待にそえるように進めることが望ましいと思う。 ・地理的に海に取り囲まれた日本において、海の研究情報をわかりやすく提示し、利用者と共に学び深めて行けることは重要であり、今後も重点的に継続して欲しい分野。

5. 今後の活動方針

・今後も、大学や他研究機関との共同研究を一層推進していく。 ・研究成果を小冊子や展示で紹介する際は、既存知見と新たな研究成果を区別して分かるように努める。 ・特別展・企画展の開催にあたっては、メインターゲットを意識して取り組む。 ・屋外で実施する観察会や見学会については、予備日の設定や屋内・オンラインでの代替実施も検討する。また、人気の高い企画については、回数を増やして参加機会を広げることを検討する。 ・自然・人文の連携による調査研究の成果を、学術論文のみならず一般県民向けにも分かりやすい形で継続的に発信し、千葉の海の魅力の県内外への波及を一層促進する。
--

令和7年度 千葉県立中央博物館実施計画 外部評価票（重点事業2）

重点事業 第2節 世界とのつながりを意識した活動

1. 事業内容および実績

具体的な取組	取組内容	R7事業内容	R7実績
①生物多様性等に関する研究の推進と発信	○県内各地（下総台地、房総海岸部、里山等）における動植物の調査研究と成果の発信 ○生態園における環境や動植物の生息状況等の継続的な調査研究と成果の発信	・重点研究「下総台地西部の自然」に関する調査研究及び資料収集 ・重点研究「房総海岸部における動植物」の予備調査、計画立案、準備【再掲】 ・「生態園」に関する展示やトピックス展の実施	・重点研究「下総台地西部の自然」について、印西市域の植物相の調査を実施した。今期は印西市の142区画の中20区画を調査した。これにより全体の70%にあたる100区画の調査が終了。 ・春の展示「房総のミニチュア「生態園」～日本初エコロジー・パークの35年～」（2月22日～6月8日）を開催（令和7年度入館者数11,216人） ・秋の展示「水辺の昆虫」（10月18日～12月21日）を開催（入館者数14,025人） ・生態園トピックス展「生態園からはじめる房総の自然観察」（2月1日から6月29日）を開催（令和7年度入館者数10,819人） ・生態園トピックス展「生態園のアブラムシ」（2月14日から5月31日）を開催（令和7年度入館者数3,665人） ・デジタルミュージアム「生態園の自然」において563件の生物に関する情報を発信 ・市民研究員との共同研究の成果として学会発表2件、論文1件 ・閉館日以外は、生態園内の動植物の巡回を実施するとともに、生態園管理班を組織し、生態園の管理体制を整えた
②世界の博物館等との連携・交流	○海外の博物館等との住民参加型の博物館活動を通じた交流事業の実施 ○海外の機関との研究等による交流	・海外博物館との連携にむけた準備、計画立案、研究等による交流	・イタリア・モンタルバーノ博物館の市民向けイベントでのプレゼンテーション（チバニアンGSSP関連）を実施 ・ベルリン自然史博物館（ドイツ）、国立自然史博物館（フランス）で資料調査を実施【分館海の博物館】 ・韓国木浦大学と海苔養殖についての研究会を実施
③ウェブサイト、展示等の多言語化	○博物館利用案内や展示案内などのウェブサイトの表現の平易化、英訳併記など ○デジタルミュージアムなどウェブコンテンツの表現の平易化、英訳併記など ○常設展示の解説パネル等の表現の平易化、英訳併記など ○展覧会の解説パネル等の表現の平易化、英訳併記など	・表現の平易化、多言語化に向けた事例調査 ・特別展の解説パネル当の表現の平易化、英訳併記など	・低年齢層への常設展示の見学補助プログラム「中央博調査隊」及び生態園で「森の調査隊」を実施（参加者数592名）。「中央博調査隊」についてはシートの内容更新・開発を検討。 ・音声ガイドのページに日本語解説に加え英語解説を作成 ・他館の調査を実施（63館） ・特別展において子供も楽しめるパネルおよび各大項目について英語の解説ページを作成し、展示室内のQRコードで検索できるようにした
④千葉県と世界のかかわりについての研究	○海外の学問やお茶、海藻など千葉県と世界の意外なかかわりについての調査研究と成果の発信	・「千葉の海藻文化と東アジア」に関する研究・資料収集【再掲】 ・海外から入ってきた学問「ちばの蘭学」に関する予備調査、計画立案 ・「千葉のお茶」に関する調査・研究及び資料収集	・海藻に関する研究会3回、調査2回を実施 ・千葉の蘭学に関して、県内調査1回、令和8年度からの共同研究に向けて打合せを実施 ・千葉のお茶に関する調査を2回実施

2. 評価指標の判定

取組内容	指標	過去実績		達成度・判定※（R7年度）				総合判定	目標値			備考
		(R5)	(R6)	目標値	実績値	達成度	判定		(R8)	(R9)	R10	
生物多様性等に関する研究の推進と発信	展覧会で「生物多様性の理解が深まった」と感じた参加者の割合	(新規)	(新規)	50%	93%	186%	A	A	60%	70%	80%以上	秋の展示「水辺の昆虫」でアンケートを実施
世界の博物館等との連携・交流	展覧会で「千葉県と世界のかかわりへの理解が深まった」と感じた参加者の割合	(新規)	(新規)	50%	90%	181%	A		60%	70%	80%以上	企画展「生薬～自然から恵み～」でアンケートを実施
千葉県と世界のかかわりについての研究	海外博物館等との共同研究の数（累積）	0件	0件	1件	1件	100%	A		1件	1件	2件	韓国木浦大学

3. 自己点検

・生物多様性に関する研究の推進・発信については、重点研究及び生態園の展示・研究報告等着実に実施した。
・世界の博物館等との連携・交流については、講演会、研究会、資料調査等着実に実施した。
・ウェブサイト・展示等の多言語化については、常設展の音声ガイドをスマートフォンで聞くことができるよう見直すとともに、英文説明を追加した。
・千葉県と世界のかかわりについての研究については、研究会、調査を着実に実施した。
・評価指標についてはすべて目標値を上回った。

4. 有識者による評価

・地域調査や市民研究員との共同研究成果発表など、地域に根差しながら専門的研究を進められていることを高く評価したい。また、海外博物館との共同事業も実施できている点を評価する。
・生物多様性に関する重点研究や生態園の展示・情報発信、海外博物館との交流、多言語化など、4つの取組をいずれも着実に実行した点を評価する。
・新規事業である生物多様性等に関する研究の推進・発信、および世界の博物館等との連携・交流は、今後の進展が期待できるスタートと評価できる。
・音声ガイドや解説ページなど、展覧会会場とウェブサイトを連動することは当たり前になりつつある。双方の特性を活かした連携を引き続き模索していただきたい。
・今後は、英語解説や音声ガイドの多言語対応を特定の展覧会にとどめず継続的に拡充するとともに、築いた海外機関とのネットワークを共同研究や交流事業へと発展させ、千葉県と世界とのつながりを県民に実感させる活動への展開を期待したい。
・世界の博物館との交流・連携については、取り組みは不十分と思われ、外部資金も活用し、海外からの招へいや国際会議の開催についても積極的に検討してほしい。
・ウェブサイトには、低年齢や知的に障害のある人たちも見据えた「やさしい日本語」のページが設けられていない。こうしたコンテンツを充実させていくことが、日本語に馴染みのない人たちへの対応ともなり得るはずである。
・世界の博物館との連携については、当館がそうした活動をしていることは将来の活動や次代の若者が成長して参加したいと思ってくれるなど、これからに繋がることなのでぜひ広く一般の方にも知らせてアピールしてほしい。
・低年齢層への常設展示の見学補助プログラムの実施や音声ガイドの英語解説の追加など、着実に来館者サービスが向上していると考える。また、特別展において子供も楽しめるパネルの設置や各大項目の英語解説を作成し、展示室内のQRコードで検索できるようにする試みは、ぜひ常設展においても展開できる試金石にいただきたい。

5. 今後の活動方針

・今後も低年齢層向けの見学補助プログラムを継続して実施するとともに、各展示において分かりやすいパネルの作成に努める。
・令和7年度は、QRコードを用いてスマートフォンで聴取できる常設展示室の音声ガイドを30件更新した。今年度も、同程度の件数の更新を予定している。
・低年齢層や知的障害のある方を対象とした「やさしい日本語」ページについては、他館の取組状況を調査し、検討を進める。
・引き続き、海外機関とのネットワークを充実させ、共同研究や交流事業へ結び付けていくように努める。
・外部資金を活用した海外機関との交流・連携や海外研究者の招へい、国際会議の開催について検討する。
・海外機関と連携して実施した事業や共同研究については、SNS等を活用して積極的に情報発信を行う。

令和7年度 千葉県立中央博物館実施計画 外部評価票（重点事業3）

重点事業 第3節 他機関との連携強化

1. 事業内容および実績

具体的な取組	取組内容	R7事業内容	R7実績
①様々な主体との連携	○君津市立清和小学校等の県内各地の様々な主体と連携したフィールド・ミュージアム事業（観察会や見学会）の実施 ○県内各地の自然や歴史、文化の地域資源情報を盛り込んだ観察ガイドマップの作成 ○市町村や団体等が県内各地で実施する観察会などの野外における博物館活動等の情報集約・公開 ○様々な主体による観光イベントや広報媒体との連携による千葉の「おもしろい」の発信	・フィールド・ミュージアム事業の実施（重点地区：北総） ・観察ガイドマップの作成（重点地区：上総臨海） ・関係団体との調整、サイト準備	・教室博物館24日、観察会4回（うち清和県民の森での観察会2回）、出前授業3回実施 ・清和地区文化祭に参加 ・フィールド・ミュージアム広報誌「しいむじな」89号、90号、91号、92号を刊行 ・「自然と文化 案内帖」の第3号を公開
②青葉の森公園周辺施設との連携強化	○青葉の森公園内で実施されるイベント等への参画 ○周辺施設と連携した展覧会や公園で1日すごせるプログラムの実施 ○展覧会やレファレンスサービス等における県立中央図書館との連携の実施	・イベント等への参加 ・公園で一日過ごせるプログラムの内容検討 ・「海の幸」等をテーマにした中央図書館との連携	・「あおばmini★miniまつり2025」に出展（参加者数210人） ・「あおばまつり2025秋」に出展（参加者数406人） ・あおば祭りへの出展を通じて公園管理センターとの関係構築 ・青葉の森芸術文化ホールでの巡回展示の実施 ・特別展開連イベントとして中央図書館と連携し、講演会（参加者数112人）、絵本読み聞かせ（参加者数17人）を実施
③博物館や研究機関等との連携強化	○国立歴史民俗博物館との共同研究や展示、講座、広報活動の実施 ○東京大学千葉演習林との共同研究や講座・観察会等の共催 ○千葉の自然と歴史、文化等に関する市町村立博物館職員等との共同研究等の実施 ○当館主催の共同研究に参画する研究員制度の整備	・国立歴史民俗博物館と共同研究「千葉の海藻文化と東アジア（仮）」の研究及び資料収集【再掲】 ・国立歴史民俗博物館との広報活動連携 ・東京大学千葉演習林との共同研究の実施、講座、観察会の共同開催 ・重点研究「東京湾の変遷を探る」の研究及び資料収集、小冊子刊行【再掲】	・国立歴史民俗博物館との共同研究「千葉の海藻文化と東アジア」に関して、研究会3回、調査2回を実施 ・歴博主催共同研究に参画し、学術書1冊発行 ・歴博との広報活動連携としてスタンプラリーを開催（8月1日～9月28日）（参加者数4,742人） ・東大千葉演習林との連携事業として観察会2件（参加者数34人）を実施 ・東大千葉演習林において、共同研究3件の調査を実施 ・改正市民研究員制度のもと市民研究員80人が活動、新規登録申請を随時受付 ・重点研究「東京湾の変遷を探る」に関する小冊子刊行

2. 評価指標の判定

取組内容	指標	過去実績		達成度・判定※（R7年度）				総合判定	目標値			備考
		(R5)	(R6)	目標値	実績値	達成度	判定		(R8)	(R9)	R10	
様々な主体との連携	様々な主体との連携数	7件	7件	8件	6件	75%	C	B	9件	10件	11件	清和県民の森観察会2件と清和小授業3件、清和地区文化祭1件
青葉の森公園周辺施設との連携強化	青葉の森周辺施設と共同で実施した事業数	0件	0件	1件	5件	500%	A		1件	2件	3件	あおばまつり2件、芸文ホール巡回展示1件、中央図書館との連携2件
博物館や研究機関等との連携強化	他の博物館や研究機関等と共同で実施した事業への参加者数	0人	123人	250人	4,776人	1,910%	A		500人	750人	1,000人	歴博とのスタンプラリー、東大千葉演習林との連携事業

3. 自己点検

・様々な主体との連携については、フィールド・ミュージアムの観察会、観察マップの作成等着実に実施した。
・青葉の森公園周辺施設との連携強化については、あおばまつりへの出展、芸術文化ホールでの巡回展示、中央図書館との連携イベントを実施した。
・博物館や連携機関等との連携強化については、国立歴史民俗博物館との共同研究・広報活動連携、東大千葉演習林における共同研究を着実に実施した。目標値を大きく上回ったのは、歴博とのスタンプラリーによる。

4. 有識者による評価

・様々な主体との連携数において、学校への出前講座が低調である。7年度は8校の実績とされ、前年度の6校より増えているが、県立の基幹館である当該館の規模からするとかなり低い数値である。ウェブサイトには出前講座の案内がみられず、そこから改善していくべきではないか。
・様々な主体との連携が75%なのは残念だが、他団体との連携には相当の労力が必要で、予算、時間、そして何より人材が潤沢でないと難しいと想像する。職員体制やシステムからも洗い出した目標設定になっているかもチェックする必要があるのでは。
・連携事業をおこなった主体が多様であることを高く評価したい。学校や文化ホール、図書館などは関係する機能部分が多いため連携の接点を比較的に見つけやすいと考えるが、イベントへの出展は開催主体との協議で難しい部分もある。しかし、そのような場こそ、普段、博物館に縁遠い方が参加されていることがあるので、積極的に連携事業を進めていただきたい。
・スタンプラリーはやり方によってはスタンプの収集だけに夢中になり、肝心のミュージアム体験に結びつかない例も少なくない。スタンプラリーを入り口として内実のある展示・学習体験へと誘導できたのかも点検をするとなお良い。
・周辺で計画される新千葉県立図書館・県文書館複合施設の整備も見据え、立地特性を活かした連携の一層の発展を期待する。
・県内各地の様々な主体と連携したフィールド・ミュージアム事業を数多く実施し、また、フィールド・ミュージアム広報誌「しいむじな」を4号分の刊行、「自然と文化 案内帖」の第3号を公開するなど、活発な活動を展開している。なお、目標値を達成できていないことは残念ではあるが、こうした事業は数をこなすことを第1とせず、いかに来場者に満足してもらったかが重要ではないかと考える
・博物館や研究機関との連携については、共に共同研究を行った成果を広く紹介するような、研究と連動した講座や観察会を今後実施していけるとよい。

5. 今後の活動方針

・令和6年度に設置された地域連携課を中心に、様々な主体との連携の推進を図る。
・国立歴史民俗博物館とのスタンプラリーは令和8年度も実施する。スタンプラリーは、常設展示の展示物を確認し、キーワードを集めた後でスタンプを押印する方式とし、常設展示への誘導を図る。
・博物館や研究機関との共同研究の成果を発信する特別展や企画展、講座、観察会の実施を検討する。
・現在、出前講座は講師派遣事業として実施している。自己点検票との名称の統一を図るとともに、ウェブサイト上での分かりやすい案内についても検討する。

令和7年度 千葉県立中央博物館実施計画 外部評価票（重点事業4）

重点事業 第4節 デジタル技術の活用

1. 事業内容および実績

具体的な取組	取組内容	R7事業内容	R7実績
①博物館資料情報のデジタル化とウェブコンテンツの充実	○高精細画像や3D画像などの取得による博物館資料情報のデジタル化と公開 ○デジタルミュージアム等におけるウェブコンテンツの充実 ○ウェブサイトのリニューアルや収蔵資料データベースの拡充等、システム環境の整備 ○デジタルデータ公開に係るポリシーの見直し（R7年度）	・デジタル化（高精細画像化、3D画像化、写真フィルムのスキャニング等）、公開 ・デジタルミュージアムの充実（地学関連） ・システム環境の検討 ・データ公開ポリシーの見直し	・資料データベースで55,223件の画像を公開 ・地学展示室の3Dデータを作成 ・3D化に関する自然誌シンポジウム開催（参加者数対面17人、オンライン60人） ・デジタルミュージアム「チバニアン期の化石」を準備中 ・デジタルデータ公開ポリシー改定案を作成
②外部システムとの連携	○国際的なネットワークとの連携（地球規模生物多様性情報機構（GBIF）、国際塩基配列データベース（INSDB）） ○国内のプラットフォームとの連携構築（ジャパンサーチ、文化遺産オンライン、J-STAGE） ○研究者間の交流促進（researchmapとの連携・拡充）	・GBIF、INSDBへの情報提供・連携継続 ・ジャパンサーチ、J-STAGEとの連携検討 ・researchmapとの連携拡充	・GBIFへ255,379点情報提供 ・DNA配列をINSDBへ254点登録 ・ジャパンサーチとの連携に向けて、先方とZOOMによる会議を実施。現在の当館のシステムスペックでは連携できる数は限定的であることがわかった ・researchmapに研究系職員は全員登録済・各自更新
③オンラインによる行事の実施	○オンラインによる自然と歴史、文化に関する講座や講演会等の実施 ○オンラインによる海外の機関とのシンポジウム等の共同開催	・講座、観察会等のオンライン配信	・オンラインでの講座等の開催回数7回（本館：6回、海博：1回） ・自然誌シンポジウムをオンラインで開催（オンライン参加者数60人）
④展示等におけるデジタル技術の活用	○高精細画像や3D画像などのデジタル化した博物館資料情報を展示等に活用 ○SNS等を活用した研究成果等の迅速な発信	・事例調査	・3Dデータをもとに製作した白亜紀シロアリコプロライト模型を常設展示で公開及び「X」への投稿を実施 ・関連学会へ参加・発表5件、論文1件公表

2. 評価指標の判定

取組内容	指標	過去実績		達成度・判定※（R7年度）				総合判定	目標値			備考
		(R5)	(R6)	目標値	実績値	達成度	判定		(R8)	(R9)	R10	
博物館資料情報のデジタル化とウェブコンテンツの充実	デジタルミュージアム各コンテンツへのアクセス件数	25,647件 -	4,379件	5,000件	5,260件	105%	A	B	45,000件 6,000件	52,500件 7,000件	60,000件 8,000件	デジタルミュージアム各コンテンツの合計アクセス件数 目標値に設定していたものはデジタルミュージアムのトップページの値であったため修正。目標値は昨年度の値をもとに設定。
展示等におけるデジタル技術の活用	SNS等による研究成果の発信数	16件	10件	19件	11件	58%	C		22件	26件	31件	論文発表プレスリリースに関するSNS発信数

3. 自己点検

・取組①に関しては、資料データベースでの画像公開、3Dデータに関するシンポジウム、デジタルデータ公開ポリシー改定案の策定等、着実に実施した。
・取組②に関しては、GBIFやINSDBへの情報提供を着実に実施した。一方でジャパンサーチとの連携については今後も検討していく必要がある。
・取組③に関しては、オンラインによる講座・シンポジウムを着実に実施した。引き続きオンラインの活用を図る。
・取組④に関しては、3Dデータをもとに作成した模型を常設展示に活用するとともに、SNSで情報を公開する等、着実に実施した。
・デジタルミュージアムのアクセス件数は昨年度実績および目標値を上回った。新規コンテンツの追加に加え、これまでにあまり実施してこなかったSNS等での広報に力を入れ、アクセス件数の増加につなげる。
・SNS等による研究成果の発信数については、目標値を下回った。今後より積極的な発信に力を入れ目標達成を図る。

4. 有識者による評価

・オンライン講座についても参加者数が多く、人々の関心が高いように思われる。オンラインならではの講座の在り方などを模索し、活用を図っていただきたい。
・資料データベースでの画像公開件数やGBIFへの情報提供点数など、資料情報の公開が着実に進められていると評価する。あわせて、デジタルデータ公開ポリシーの改訂に取り組み、現在の研究情勢への適応をはかっている点も評価できる。
・資料情報のデジタル化や外部との連携は進んでいると評価できる。ただし、生物分野（GBIFやDNAなど）が多いため、他分野での取り組みも進むと良いと思う。
・博物館資料情報のデジタル化とウェブコンテンツの成実は、資料データベースでの画像公開や地学展示室の3Dデータの作成、3D化に関する自然誌シンポジウム開催、デジタルミュージアム「チバニアン期の化石」を準備、デジタルデータ公開ポリシー改定案に着手するなど幅広い活動が展開できている。とくに、デジタルデータ公開ポリシー改定は、これからの博物館における情報発信として様々な可能性をもつデジタルデータの取り扱いに関係するものであり、重要な作業になると考える。
・SNS等による研究成果の発信数は目標19件に対し11件とのことだが、SNSは研究成果を広く届けるとともにデジタルミュージアムへの来訪を促す入り口でもあり、今後、より積極的かつ計画的な発信の強化を期待したい。また、ジャパンサーチとの連携について現行システムの仕工作上的な制約が明らかになったことは課題の所在を明確にした前進であり、今後のウェブサイトリニューアルやシステム環境整備の中で対応を図ることが望まれる。
・DXは着実に推進していると見受けられるが、広報同様SNSの発信が不十分であるのは、組織的な構造と思われ、研究とは別に全館的な広報体制の構築が急務と思われる。

5. 今後の活動方針

・オンライン講座のあり方については、これまでの経験を踏まえて、更なる活用を図る。
・生物分野以外の部分の資料情報のデジタル化については、古写真や絵はがきのデジタル化を中心に進める。外部との連携については、引き続き、検討していく。
・引き続き、展示物や収蔵資料の3Dデータ化と、その成果の展示への還元を進める。
・SNS等による研究成果の発信数が少なかったのは、プレスリリースを中心としていたためである。今後はプレスリリース以外の手法も活用し、幅広く研究成果を発信する
・SNSの発信が不十分である点について、館全体が認識を共有し、研究員一人一人が情報発信を意識する。

令和7年度 千葉県立中央博物館実施計画 外部評価票（重点事業5）

重点事業 第5節 資料を未来に引き継ぐ

1. 事業内容および実績

具体的な取組	取組内容	R7事業内容	R7実績
①収集資料の標本化・整理作業 及び登録の推進、地域館資料 の集約・保管	○収集資料の標本化・整理・修復作業の推進 ○収蔵資料データベースへの登録の推進 ○大利根分館、大多喜城分館の資料集約・保管	・継続的な標本化、整理、修復作業等 ・継続的な資料データベース登録 ・大利根分館での資料保管・活用 ・大多喜城分館の資料確認、移動	・本年度資料の受入件数29,831件（本館：28,477件、海博：1,354件） ・本年度資料データベース登録点数16,325点（本館：15,343点、海博：982点） ・大利根分館から県指定・国登録の資料を本館に移動
②資料管理体制の強化	○総合的有害生物管理の手法や定期的な温湿度モニタリング等による収蔵資料の管理体制強化 ○資料保存に関する外部研修会等への参加による職員のスキルアップ	・IPM手法や温湿度のモニタリング等による収蔵庫管理 ・職員の外部研修等への参加（年2人）	・岩石資料のアルコール洗浄を実施 ・年4回のトラップ調査を実施 ・国立民族学博物館教員によるIPMの全職員向け研修の実施
③資料救済ネットワーク 拠点機能の強化	○「博物館資料救済システム」のセンター館として災害発生時の情報集約、平時の情報伝達訓練や研修等を実施 ○県内各地の博物館や地域に所在する資料情報の集約 ○自然史系標本セーフティネット、歴史資料ネットワークなどと連携した全国規模の資料救済 ○地域継承が困難な資料に関する相談受付 ○寄託・寄贈資料の積極的な受入れ	・県内各地の資料情報の集約（重点地区：ベイエリア） ・自然史系標本セーフティーネット等との連携検討 ・地域継承が困難な資料に関する相談体制の検討・構築	・北総資料ネットとの連携を実施 ・学校に残されている資料の調査方法について検討、統合が予定される小学校2校に保存されている資料の調査を実施 ・化石コレクションの寄贈受入れ準備中 ・県立高校全校を対象として、学校に保管されている自然誌標本のアンケートを実施 ・木更津高校所蔵の自然誌標本の実態調査を実施 ・大網白里町の神社において、絵馬の保存方法などについてアドバイスを実施 ・展示施設を改修中の香取神宮から県指定文化財の寄託を受けた ・郷土玩具のコレクションの調査を実施

2. 評価指標の判定

取組内容	指標	過去実績		達成度・判定※（R7年度）				総合判定	目標値			備考
		(R5)	(R6)	目標値	実績値	達成度	判定		(R8)	(R9)	R10	
収集資料の標本化・整理作業 及び登録の推進、地域館資料の 集約・保管	資料データベースへの登録点数（累積）	504,902点	510,441件	525,000件	526,766件	100%	A	A	550,000件	575,000件	600,000点	令和8年4月1日時点
資料管理体制の強化	収蔵資料の事故による破損件数	0件	0件	発生させない	発生していない	100%	A		発生させない	発生させない	発生させない	虫害痕が確認された資料あり※
資料救済ネットワーク拠点機能 の強化	県内外の資料ネットワークとの連携数	0件	0件	1件	1件	100%	A		2件	3件	4件	北総資料ネットとの連携

3. 自己点検

※収蔵資料の点検の結果、虫害痕が確認された資料については、速やかに対応済み。（849件）

4. 有識者による評価

・着実な資料調査とデータベースへの登録が続けられている。膨大な資料に対して、それらの調査は一朝一夕で為せるものではないため、目標値を定めての不断の活動が重要である。このペースを保ち、適切な資料調査を積み重ねていただきたい。
・北総資料ネットとの連携を実施したことは、大きな一歩であると評価する。加えて、学校所蔵資料群についても調査を実施するなど、資料救済の地域拠点としての役割が確立しつつあると考え、評価できる。各所で資料管理保存の担い手が減少している中、これらネットワークの強化と活動は益々重要になってくるので、本重点事業に期待する部分は大きい。
統合が予定される小学校2校の保存資料の調査や、県立高校全校を対象とした自然誌標本のアンケート・木更津高校の実態調査など、学校に残された資料の把握に踏み出した取組は注目すべき活動。少子化に伴う小中学校の統廃合は今後全国的に増加が見込まれ、統廃合校に保管された自然誌標本や郷土資料等の文化資源をいかに散逸させずに次世代へ引き継ぐかは、地域の博物館が担う領域となるのではないかと。本年度に着手した調査方法の検討を、県内のモデルとなる仕組みへと発展させていくことを期待したい。
・「収集資料の標本化・整理作業及び登録の推進、地域館資料の集約・保管」、また「資料管理体制の強化」は適切に取り組まれている。虫害痕確認資料に対しても迅速に対応されており、評価できる。
・「資料救済ネットワーク拠点機能の強化」について、千葉県の博物館資料救済システムのセンター館の役割を担っているため、県内各地の資料情報の集約や地域継承が困難な資料に関する相談体制の構築を、より積極的に進めてほしい。
・資料管理体制の強化において、文化財IPMの導入を進める動きが見られるなど、今後の資料管理の強化が期待できる。
・資料救済ネットワーク拠点機能の強化において、多様な活動を展開している。とくに自然史資料や歴史資料を巡る連携活動は、千葉県の博物館拠点となる千葉中央博物館の役割を十分に果たしたものと考える。

5. 今後の活動方針

・引き続き、着実な資料調査とデータベースへの登録を進める。
・令和8年度以降も年4回のトラップ調査を継続するとともに、収蔵資料の点検を実施し、虫害痕がみられる資料の把握に努める。
・資料救済ネットワーク拠点機能の強化に向け、千葉県博物館協会と連携し、県内各地の資料情報の集約及び地域継承が困難な資料に関する相談体制の構築を進める。

令和7年度 千葉県立中央博物館実施計画 外部評価票（基盤事業）

基盤事業の評価指標

1. 判定

指標	過去実績		達成度・判定※（R7年度）				総合判定	目標値			備考
	(R5)	(R6)	目標値	実績値	達成度	判定		(R8)	(R9)	R10	
資料の利用件数	199点	236件	208件	121件	58.2%	C	B	218件	228件	238件	本館：88件 海博：33件
学術著作の発表数	107件	68件	112件	112件	100.0%	A		119件	124件	130件	本館：93件 海博：19件
外部資金等を活用した研究件数	30件	24件	27件	20件	74.1%	C		30件	33件	36件	本館：13件 海博：7件
講座・観察会、見学会の参加者数	2,085人	1,503人	1,750人	1,749人	99.9%	B		2,000人	2,250人	2,500人	本館：1,350人 海博：399人
レファレンスサービス対応件数	3,669件	3,486件	3,800件	4,131件	108.7%	A		4,000件	4,200件	4,400件	本館：4,054件 海博：77件

2. 自己点検

・資料の利用件数については、目標値、前年度実績ともに下回った。資料データベースの公開を引続き進め、利用を促す。 ・学術著作の発表数については、目標値に達した。 ・外部資金等を活用した研究件数については、目標値を下回った。令和7年度は科研費申請件数24件であったものの新規採択件数は2件と採択数が少なかった。 ・講座・観察会、見学会の参加者数は、目標値とほぼ同じであった。今後も、開催される講座・観察会、見学会についてSNS等を用いた周知を実施する。 ・レファレンスサービス対応件数については、目標値を上回った。

3. 有識者による評価

・資料の利用については、資料利用を促すポイントがどこにあるのかを、利用種別ごとの分析を深めていただきたい。海博に比べて本館収蔵資料の利用件数が低調であると考える。そもそも資料発見に問題があるのか、資料利用の手続きが煩雑なのかななどを精査して、改善検討を進めていただきたい。 ・資料の利用促進については、公開促進だけでなく利用価値の高い資料の収集と適切な整理と保存も重要であるため、その点の検討も必要と思われる。 ・資料の利用件数に関しては、他館・他機関での予算の縮小や人材不足、物価高騰（輸送費等）などの要件が関係しているのが原因のひとつにあるとしたら、右肩上がりに増やすのは難しいのでは。 今後、リニューアルの大事業を同時進行で進めていくなかで、科研費を獲得し、研究活動の強化・増大を図るのは難しいかもしれない。 ・外部資金の獲得が不十分であるのは、これからの時代研究の推進が極めて厳しくなることが予想されることから、館全体の取り組みとして寄附金や科研費の獲得等について検討することが急務と思われる。 ・外部資金等を活用した研究件数が目標値を下回り、新規採択も2件と少なく、過去2年と比べても低下が著しい。その理由をどのように分析しているのか。研究を後押しする環境整備が必要なのではないか。 ・科研について24件の申請中、採択が2件というのは申請書の書き方、テーマ設定も含めて、学芸員全員で分析する必要があると考える。一方で、24件の申請を出したことは評価できる。 ・レファレンスサービスは、データとして集計している館は少ないが、博物館がどれだけ地域の人々に意識され信頼されているのかの指標にもなるので、継続してモニタリングしていくとよい。
--

5. 今後の活動方針

・資料の利用について、利用目的や資料の種類による傾向の違いを把握するとともに、利用方法や手続きについても精査する。 ・資料の利用促進に加え、利用価値の高い資料の収集、適切な整理・保存についても検討する。 ・科研費をはじめとした外部資金の獲得に向け、研究員に対して積極的な申請を促す。 ・科研費の採択に向け、採択された申請・テーマ等を館内で共有し、採択率の向上に努める。 ・今後の博物館活動の基礎となる研究活動は、引き続き推進していく必要があるため、研究環境の改善について、館内で検討を進める。 ・レファレンスサービスについては、引き続きモニタリングを行うとともに、来館（対面）、メール、電話等の件数を把握し、今後の対応に活用する。
